



発行 真宗大谷派 高山教務所
発行者 出雲路 善公
〒506-0857 高山市鉄砲町6番地
(0577) 32-0776
*毎月20日発行 50,000部
三市一郡無料配布
印刷 山都印刷株式会社

念じられ 照らされて

「怨み」の呪縛から解かれる道

高柳正裕



〔略歴〕
1956年生まれ。金沢大学卒業後、タクシー会社・鉄工所勤務後、大谷専修学院、大谷大学大学院を経て、教学研究所に勤務し2009年末退職。

しばらく前に、大阪でバスの運転手が、クラクションを鳴らされて頭に来たという男に刺殺された。しかも殺された運転手は、その男の車にクラクションを鳴らした人ではありませんでした。犯人は、相手を確かめることができないほど内からわき上がった怒りに翻弄されて、事件を起こしたのです。殺人を犯してしまったその男は、自分自身でも、後悔どころか「なんで自分はこんなことをしてしまったのか」と呆然自失し、絶望的気持ちになったであろうことは、想像に難くありません。

私、その事件は特別短気で粗暴な人間が起きましたことであって、自分には関係ないとは、全く思えません。そうではなく、この事件は、私たちが現代人が心の底に抱えているイライラと怨みの現れの典型であるということ、そして、イライラと怨みが解けない限り、誰でもがこうした事件を起こしうるといふことを、感じずにはおれないのです。

だいたい以前から、「キレる若者」や「暴走老人」ということが言われるように、現代人はみないつも苛つき、何かのきっかけで怒りが爆発してしまふ。駅の構内で肩がぶつかったり、足を踏まれたというだけで、怒りに駆られて相手をホームから突き落としたり、

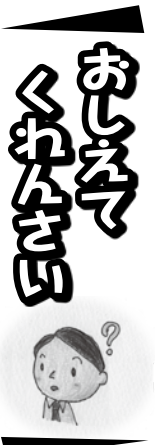
カウンセリングなどのケアを受けることで見えてくるのは、教員になるために我慢して「いい子」「正しい子」として生きてきたということ。またエリート社員と言われる世間から羨ましがられるような人が、とんでもない事件を起こすのは、その根に、いつも人は自分の表面しか見えてくれない、立派で正しくなければ見捨てられるという、深い飢餓感を伴う強迫観念に基づく、自己破壊衝動があるからです。それは言い換えれば、ずっと善人・正しい人を演じ続けなければ捨てられる、そして親からも世間からも捨てられてきたという、深い怨みでこそあるのです。

ですから、怨みを深く心の底に抱いている「正しく、立派な親」がいる家庭は、とても息苦しい。それは「オレはちゃんとやってきたのに、お前(子供)は、何やってるんだ」と、子供に対して苛つかざるを得ないからです。子供に対してだけでなく、誰かを「何やってるんだ」と責め立てずにおれない衝動が内に潜んでいるのです。

しかしこの怨みは、実は私は周りから認められるべきであるという、国王になりたいという欲求であるのです。それは単

に傲慢というだけではなく、誰一人信じてあげることができないから自分を強くし、周りを支配することで自分を守らざるを得ないという、辛くて孤独な心です。

この孤独は、どんなに自分が世間から見捨てられても絶対に捨てない、仏の慈悲に触れることによつてのみ溶けるのです。そしてそれは、正しいと思っていた自分が実は、自分自身なんともならぬ、怨みに翻弄される愚かで悲しい者であることが、身にしみて、逃れようもなく気付かされる、頭がさがる時であるのです。



問 今の時代は、お金をせせば食べたい物、欲しい物は簡単に手に入ります。また、ゴキブリやハエなどは殺虫剤、雑草は農薬などで処理します。自分にとって迷惑だと思えば、同じ命に対してもこんな恐ろしいことを当たり前のようにしてしまいます。本当に申し訳ない人間です。どうしたらいいのでしょうか。

答 仰るとおり、現代はお金や科学の力で何もかもが人間の意のままになってしまふ時代となりました。物が豊かになる一方、欲望は際限なく膨ら

み、満たされることがありません。傲慢になった私たちは、都合の悪いものは目の前から消そうとし、生きるために必要な食事が、他のいのちを犠牲にして成り立っているということさえ顧みようとはしません。

しかし食べることをやめたり、他のいのちを傷つけたりせずに生きることができないのが私たちです。どうしたらいいのでしょうか。

親鸞聖人は「煩惱は死ぬまでなくならない」と仰いました。そんな煩惱を抱えたままの私たちに寄り添ってくれるのがお念仏の教えなのでしよう。申し訳ないという思いをご縁として、ご一緒に仏さまの教えを聞いていきましょう。

別院真宗公開講座のご案内

今月号執筆の高柳正裕さんがお話されます。

2016年1月19日(火)・2016年2月18日(木)


おび
テーマ「怯えと不安が溶ける道」

会場 高山別院 御坊会館
時間 午後2時から4時 (両日とも)
聴講料 各日600円

除夜の鐘と修正会

— お正月も飛騨御坊にお参りください —

高山別院では年の暮れ、参道両脇や階段にロウソクを灯す万灯会、年越し前から除夜の鐘つきが始まります。年が明け、午前0時から本堂にて修正会が勤まります。修正会は、一年の初めに莊厳を整え、身も心もひきしめ、仏恩報謝の思いをもって新しい年にのぞむ仏事です。ぜひ、高山別院にお参りいただき、新年の歩みを始めましょう。



万灯会	12月31日(木)	午後11時
除夜の鐘	12月31日(木)	午後11時45分
修正会	1月1日(金)	午前0時
	1月2日(土)	午後1時
	1月3日(日)	午後1時

※甘酒を用意しております
出雲路善公輪番
三島多聞氏
くぼた田哲氏

☎ 12月21日～31日：三枝正尚氏「随縁寺」
☎ 1月1日～10日：出雲路善公輪番
☎ 1月11日～20日：門端讓氏「弘誓寺」
☎ 1月11日～20日：門端讓氏「弘誓寺」
☎ 1月11日～20日：門端讓氏「弘誓寺」

家族で話そう

私を照らす

ひかりの言葉 ⑪

酒井 義一

悔いの残る別れ

その人は、母との別れをとて悔やんでいました。生前に親孝行らしいことは何ひとつすることができませんでした。それどころか、母にひどい言葉を投げかけ、ひどい態度を取ってしまったこともありまして、その一つひとつを思い返しては、胸が締めつけられるような思いに沈んでいました。今からでも母のために何かをしてあげたい。それがその人の痛切な思いでした。

思いが届かない

そのような思いを抱いて、その人は母のために立派なお内仏を購入しました。そして、生前に母が好きだったものをお供えしました。それが母への、せめてもの供養だと思ったからです。

しかしある時、その人はごく当然の事実が、いきなり愕然としたのです。それは、いくらお供えをしても、それが一向に減らないという事実でした。いったい自分の思いは、亡き母にちゃんと届いているのだろうか。その人はとても不安になってしまいました。

言葉との出会い

そんなある日、その人はこんな言葉に出会いました。そして、自らの人生にとって大きな方向転換をすることとなったのです。その言葉とは、

亡き人へ
いいところへ行くんだよ
と言う
そういう私は
どこへいくんだろう
という言葉でした。

本当の供養とは、決して亡き人の冥福をいのことだけでは無いということ、その人に教える言葉でした。

そして、肝心のこの私は一体どこに向かつて生きていこうとしているのか。そのことを確かめていくことを、自らに迫ってくる言葉でした。

自分に出会う

一体自分はどこに向かつて生きていこうとしているのか。

やがて、その人はあることに気が付いたのです。それは、今まで亡き母の供養のためと思って自分してきたことは、本当の供養なのではなく、自分自身の後悔の気持ちや自責の念を消すための行為ではなかったのか、ということ。身を焼かれるような自責の念から、早く解放されて楽になりたいという思いが私の中にあつたのではないかと、亡き母を拜んでいるようで、実は自分自身が安らかになることを拜んでいたということに思い至ったのです。

本当の供養とは

供養というと、亡き人の冥福をいふことだと思ってきました。しかし、それはちよつと違うようです。本当の供養とは、その人が確かにこの世を生きていたということ

を思い起こし、心に刻み、忘れないうと誓うということ。言葉を換えれば、その人との別れを大切に体験しながら、今を生きて私が、教えに道を尋ねていく出発点とするということではないでしょうか。

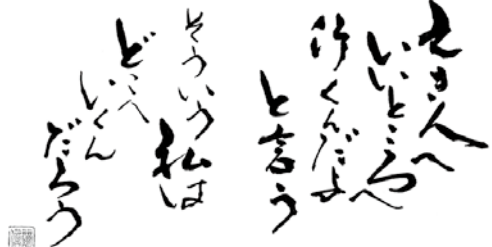
こんな言葉があります。

亡き人を拜む私が
亡き人から拜まれている
迷うな
と
生きる
と

この言葉は、亡き人の冥福を拜んでいる私こそが、逆に亡き人から、迷わずに人生を生き切つてほしいと拜まれていることを教えている言葉です。

亡き人との別れという出来事が、教えに道を尋ねていく仏縁となつていくということでしょう。

その人との別れを無駄にはしない生き方を、私が始めていくこと。そこにこそ、本当の意味での供養というものがあるのではないのでしょうか。



今回は藤場芳子さんの「女と男のナムアミダブツ⑩」です。

飛驒の真宗

伝承散歩 ⑬ 歴史を見た山門

一七六六(明和三年)、代官として飛驒に着任した大原彦四郎は、年貢の取り立ての強化など、様々な改革を行いました。しかし、その改革により農民は追い詰められていき、一揆に発展していききました(大原騒動)。

一七七三(安永二年)九月、水無神社(一之宮町)に飛驒中の農民が一万八千集結し、代官への抗議活動が行われました。そして、農民たちは高山の町へ米や炭などの物資の流通を止め、大きな打撃を与えました。

十月、数多くの農民が陣屋へ赴き、代官に直接訴える強訴を決定しました。このままでは天領である飛驒で不祥事が起きかねないと判断した代官は、幕府を通じて郡上藩をはじめとする近隣の諸藩へ援軍を要請しました。

十一月十五日朝、郡上藩の兵は農民が多く集まっている宮村(現一之宮町)を襲撃し、水無神社に集まっていた農民たちと神主を捕えました。そこから逃亡した農民たち

ちものちに多く捕まり、死罪十九人、遠島十四人など、罰金刑などの軽い罪を含めると一万人近くの人々が処罰されたといわれています。これを大原騒動のうち安永騒動とい

います。当時の水無神社は神仏習合の寺社であり、広い境内の中に神社と寺院が並んでいたといわれます。しかし、この騒動で神主が処刑され、新たに信州から神主が招かれました。その際に神道のみならず神主とあらためられ、境内の仏教に関する建造物等は撤去されました。

その水無神社にあった山門は、現在往還寺の門として移築されています。江戸の世の飛驒の農民たちの取り組みを見ていた遺構なのです。



往還寺の山門【高山市一之宮町】

高山別院お煤払い奉仕のお願い

12月21日(月)午後1時からのおつとめの後、本堂のお煤払いを行います。1年の汚れを落とし、新年をお迎えします。ぜひともご奉仕をお願いいたします。

※持参品…マスク・タオル・軍手など



真宗本廟おみがき奉仕団

御影堂・阿彌陀堂の仏具のおみがきを日程の中心とした奉仕団です。親鸞聖人を宗祖と仰ぎ、たずねてこられた無数の人々の歴史を体感することをとおして、真宗門徒としての歩みを確かめます。日程中に帰敬式(おかみそり)を受式することもできます。

期間 3月1日(火)~2日(水)【一泊二日】
日程 お話・話し合い
清掃奉仕(仏具みがき)
宿泊 真宗本廟同朋会館
定員 20名
参加費 18,000円
締切 1月25日(月)

募集

※詳細は高山教務所へお問い合わせください。

ご回壇

1月

11日(月) 映芳寺

17日(日) 稱讚寺

【下之町】

大谷婦人会 新年定例会

期日 1月11日(月)
時間 午後1時から
会場 御坊会館
会法 出雲路善公 輪番

甘酒の接待があります

非戦平和展

年末年始に原爆の図を別院本堂に展示します。ぜひご覧ください。

期間 12月29日(火)~1月4日(月)

展示内容 第6部:原子野
第7部:竹やぶ

